

大学サッカーの現状と課題 ～運営担当制度導入に着目して～

The Present Condition and Challenges of College Soccer League ～Focusing on The Introduction of Handling Management System～

1K09B104 - 9

指導教員 主査 原田 宗彦先生

白井 豪

副査 木村 和彦先生

【目的】

本研究の目的は、質的調査を通して、関東大学サッカーの現状把握をすることで、関東大学サッカーリーグの知名度を上げることや、観客数増加の方策を探っていくものである。過去にあまり研究されてこなかった大学サッカー界ではあるが、「近年、人気、知名度共に右肩下がりとなってしまう大学サッカー」（今井・白垣、1995）や「大学サッカーは、かつては日本サッカーの最前線であり、ピラミッドの一端を担ってきた。その後は高校生以上、プロ未満に位置する立場にあった。」（鈴木、2007）などからわかるように、過去に日本サッカーの中心となっていた時代があった。

先行研究や文献などによって現状を把握し、2012年度から実施されることとなった運営担当制度導入によって、大学サッカー界に起きる変化や実態を調査する。実施初年度だからこそ様々な課題や意見の食い違いが生まれていることが予想されるので、そこを調査することで、今後の方策を提案していく。

【方法】

書籍や過去の論文によって、大学サッカーが辿ってきた歴史や、現状把握を行う。

運営担当制導入に関する調査は、関東大学サッカー1部リーグに所属している全12チームの中で、チーム内で運営担当制を中心となって進めている代表者12名（学生連盟に所属）を対象に、アンケートによる調査を行った。さらに、より深い回答を得るためにアンケート内に4つある質問の回答を全て自由記述とし、現状把握や実施して感じたことなどを聞いた。

その後、アンケートの回答結果を踏まえて、運営担当制度の発案者で、関東大学サッカー学生連盟副理事も務める中野雄二氏にインタビューを行った。インタビューは半構造化インタビューを用い、事前に質問事項を作りそれをもとに1対1形式でインタビューを行い、適宜追加質問を行った。

それによって、運営担当制度を導入したことによる変化や様々な問題点を、2つの観点から見ることができた。

【結果】

各大学へのアンケート調査と、中野氏へのインタビュー調査をふまえると、いくつかの共通点や差異を見つけたこと

ができた。現状でうまくいっている部分や、今後改善の余地が見られる部分など様々だった。

運営担当制度導入によるメリットとして、以下の4点が挙げられた。

- (1) 選手の意識改革
- (2) 学生連盟の人員削減による効率アップ
- (3) ホーム&アウェイ制度へのスムーズな移行
- (4) 地域密着の体現

また、デメリットとしては以下の2点が挙げられた。

- (1) 応援に回ることのできる選手の減少
- (2) 努力しても見返りのない現状

他にも、大学サッカーの現状についての話を多く聞くことができた。それぞれの点を考慮したうえで、今後の大学サッカーリーグが発展し、知名度を上げ、観客数を増加させることのできる方策を定めていく。

【考察】

実施初年度ということで、今回の制度の発案者側も実施する側も、非常に意欲的にこの制度遂行に動いていたことがわかった。そのなかで必要となるのは、大学サッカー界の中に、大学サッカーそのものを変えていこうと考える人が出てくることである。調査の中で、高校サッカーなど、現在サッカー界でビックイベントと言われるものも、過去に注目を浴びなかった時代があり、メディア露出などの戦略を経て現在の状況まで到った過去があったことが分かった。大学サッカーも今後、何らかの手を打って、世間の注目をあび、観客数を増やす努力をしなければ、今後の発展は非常に難しい。

この制度導入によって、様々なメリットやデメリットが生じたが、それを考慮していくつかの方策を提案した。

- (1) 方策Ⅰ：ホーム&アウェイ制度の実現
- (2) 方策Ⅱ：PR活動の充実
- (3) 方策Ⅲ：メディアと連動した活動の実現

運営担当制度導入後、何も変わらなければ現状維持のままだが、現場と発案者ともに、今後大学サッカーが発展していくことを望んでおり、なんらかの行動が必要不可欠であるとしていた。上にあげた3つの方策はすべて実現可能なものであり、これによって大学サッカーへの注目や観客数増加を望めると考える。